

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：44316

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22700251

研究課題名（和文） 公共図書館における郷土資料活動の歴史研究：オーラル・ヒストリー・アーカイブの構築

研究課題名（英文） Historical Study on the Local Collection Activity in Japanese Public Libraries: Toward the Development of Oral History Archive

研究代表者

桂 まに子 (KATSURA MANIKO)

京都女子大学・司書課程・講師

研究者番号：80457902

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦後日本の公共図書館における郷土資料活動の歴史を記述することを目的に、東京・三多摩と新潟県の図書館を調査した。前者は戦後に図書館が開館し、今日まで継続的に郷土資料活動を行っている地域、後者は戦前から図書館があり、かつ積極的に郷土資料活動を行っていた地域である。具体的には、文献調査、インタビュー調査、現地調査を行ってデータを整理し、それぞれの地域の郷土資料活動についての記録をまとめた。次年度以降もフォローアップ調査を行い、オーラル・ヒストリー・アーカイブを完成させる予定である。

研究成果の概要（英文）：This study aims at describing the history of Japanese public libraries from the standpoint of 'local collection'. The survey about 'local collection' was targeted for the libraries of 2 areas, Santama (Tokyo) and Niigata. The former have started after World War II and been continually engaged in 'local collection' activities until today, while the latter had been started since before World War II and been extremely active in 'local collection'. Based on data obtained through several investigations (literature research, interview research, field survey), the researcher summarized the record of local collection activities in their respective libraries.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学

キーワード：公共図書館、郷土資料、地域資料、オーラル・ヒストリー、アーカイブ

1. 研究開始当初の背景

日本の公共図書館の郷土資料は、各地域の図書館が一般図書とは別に独自に収集に努めている資料群で、今日では「地域資料」の名称を用いる図書館も増えてきた。そのような活動の根拠は、1950年に制定された図書館法にあり、第3条第1項に図書館が収集・提供する資料として郷土資料を挙げている。しかし、公共図書館を対象に実施された初の地域資料全国調査の報告書『地域資料に関する調査研究』（国立国会図書館、2008）によると、実際に各地の公共図書館が所蔵する郷土資料は現在でも未整理や未所蔵のものが目立ち、地域に関するすべての資料を体系的に収集するに至っていない。

このような状況を生み出した背景には、1970年代より中小規模の市町村立図書館が貸出し重視型の図書館として発展したことがあった。既存の郷土資料の扱いは後回しとなり、その状況は現在も続いている。しかし、情報化や地方分権化が推進される今日、各自治体の公共図書館は当該地域に関する資料や情報を積極的に収集・整理・保存し、利用に供することが強く要請されている。その資料がまさに郷土資料であるが、先述した状況から、日本の公共図書館では時代の要請に見合った基盤整備が十分にされていない。これは、現場の図書館の責任だけではなく、図書館情報学において郷土資料を扱う研究が非常に少ないことにも起因すると考える。

2. 研究の目的

本研究の最終目標は次の2点である。

- (1)戦後日本の公共図書館における郷土資料活動の歴史を記述すること。
- (2)郷土資料の収集・整理・保存・提供に対してどのような取り組みが行われてきたのか、未着手なものがあればその要因は何である

かを調査して、現在の公共図書館が解決しなくてはならない郷土資料問題の全体像を明らかにすること。

研究代表者が行ってきた過去の研究から、郷土資料活動には、東京・三多摩地域と新潟・新津市(現新潟市)の図書館および図書館員が大きな貢献をしていることが明らかになった。本研究2年間の具体的な目的は、この2つの地域に限定して、文献調査とアンケート調査、インタビュー調査を行い、当該地域の郷土資料活動の歴史に関するオーラル・ヒストリー・アーカイブを構築することである。

3. 研究の方法

東京・三多摩の図書館30館における郷土資料活動と、三多摩の活動に影響を与えた青木一良が館長を務めた新津市立図書館を含む新潟県内の図書館24館の郷土資料活動を調査した。両地域における調査結果をふまえ、郷土資料の収集・整理・保存・提供に対する取り組みの相違と、両者に共通する郷土資料に関する問題点を分析する。

本研究の目的を達成するために、各年度において以下の研究方法を用いた。

文献調査：三多摩および新潟県の図書館と郷土資料活動に関する文献を収集し、活動内容を整理した。特に、両地域の郷土資料活動に関わる青木一良の著書『地域図書館活動』（1972）に記録された内容を丁寧に読み込み、関連資料を収集した。青木の人物像については、台湾総督府図書館時代の師である山中樵との関係を中心に文献調査を進め、新たな資料の発掘にも努めた。

インタビュー調査、現地調査：三多摩および新潟県の図書館を訪問し、現地にて現在の郷

土資料の実態を調査した。また、各図書館の郷土資料活動の特徴を詳しく記録するために、郷土資料担当者へのインタビュー調査を行った。

4. 研究成果

本研究で図書館の郷土資料活動に関する調査を行った東京・三多摩と新潟県にはそれぞれ大きな特徴がある。前者は戦後に図書館が開館し、今日まで継続的に郷土資料活動を行っていた地域であり、後者は戦前から図書館があり、かつ積極的に郷土資料活動を行っていた地域である。両地域における郷土資料活動の重要人物である青木一良については、数少ない関連文献から彼の図書館員としての活動の軌跡を辿ることができ、図書館が地域の「情報図書館」となるための試みとして、郷土資料を用いた様々な実践に取り組んでいたことを裏付けることができた。

新潟県での現地調査では、青木にゆかりのある人物に焦点を当てて文献調査およびインタビュー調査を行った。その結果、新潟県立図書館の館長を務めた山中樵との共通点を見出し、両者とも台湾の台湾総督府図書館での勤務経験があり、山中は青木にとって台湾時代の師であることが分かった。台湾総督府図書館に関する国内の文献調査はできうる限り行ったが、次年度以降に機会を見て現地調査も行いたい。

東京・三多摩（30館）と新潟県内（24館）の図書館に関する郷土資料活動の調査には、文献資料の不足が大きな難関となった。郷土資料の歴史研究が進行しない要因の1つはここにある。記録情報がほぼ皆無に等しい図書館の郷土資料活動については、現地調査およびインタビュー調査を実施し、現在と過去の郷土資料活動を可能な限り詳細に記録するよう努力した。

このように、文献上に現われにくい郷土資料活動の歴史を記録するために「オーラル・ヒストリー」の手法を用いたことにより、収集したデータをもとにした新たな記録の作成が可能となった。ただし、予定していた以上に調査の量が多くなり、データの整理に時間を要した。次年度以降はフォローアップ調査を行いながら、三多摩と新潟県の図書館における郷土資料活動のオーラル・ヒストリー・アーカイブを完成させる予定である。さらに、三多摩と新潟県のアーカイブの内容を比較し、郷土資料の収集・整理・保存・提供に対する取り組みの相違や、両者に共通する郷土資料に関する問題点とは何であるかについても引き続き分析していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

- ① 桂まに子, 地域資料小史:後向きな資料からの脱却, 146回京都大学図書館研究会, 京都大学, 2012年3月27日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桂 まに子 (KATSURA MANIKO)

京都女子大学短期大学部・司書課程・講師
研究者番号：80457902